

## ◆「有馬記念」に名を残すJRA二代目理事長有馬頼寧の功績

古本屋には取次などの問屋があるわけではないので、注文を出せば望むものが入荷するというわけではありません。では仕入れをどうしているのかというと、交換会とお客様からの買い取りの二つが中心になります。交換会というのは古書組合加盟店だけが参加できる、運営するのも出品するのも落札するのも古本屋、という競り市です。ただ、これに参加すれば目的のものが仕入れられるかというと、そう上手くはいかなくて、他の店に買われてしまうこともありますし、そもそも競馬や馬の本が出品されていない場合も多く、まあそこに面白さもあるのですが、いろいろ大変です。

数年前に交換会で買ったのが『ひとりごと 有馬頼寧個人雑誌 全19号揃』。これは有馬記念に名を残す競馬会二代目理事長の有馬頼寧が晩年出していた個人雑誌で、当初は無料、途中から会費を取る形で配布されたものです。1号40頁程の小冊子で、これまで会った人物の印象や赤穂事件など内容は多岐にわたります。刊行時期が理事長在任期間と重なるものの、競馬に関する記述があまりないのが残念ですが、「競馬界入門記」の項では、理事長就任の経緯や競馬論などと共に、女性や子供を引きつける重要性に言及しているのが興味深いです。

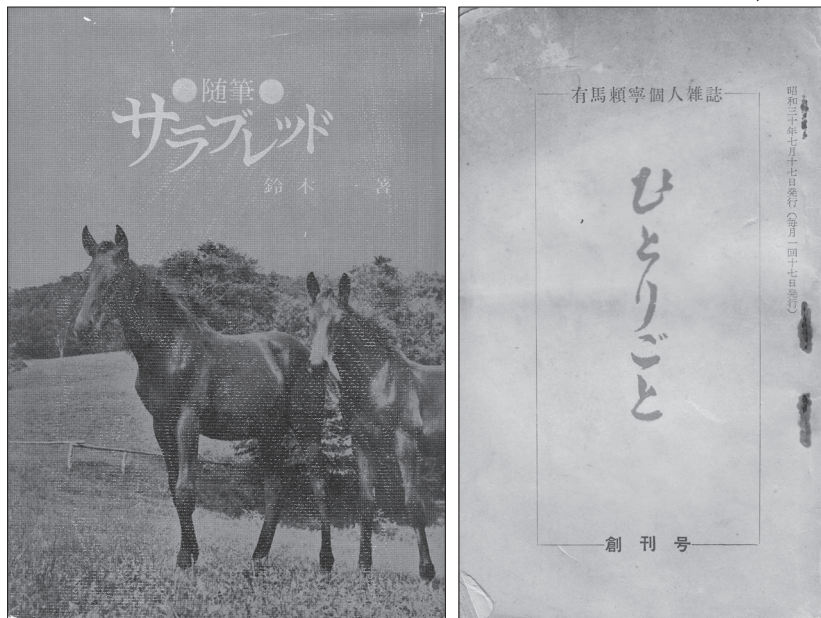
『ひとりごと』は、息子の直木賞作家有馬頼義の手で1冊にまとめられています。時系列も整理され、「創刊のことば」や病気で原稿が書けなかったお詫びの文など削除されているものがあります。何より最終の「追悼号」前に作られたため、当然これは載っていないので、山本一生著『恋と伯爵と大正デモクラシー 有馬頼寧日記1919』などで頼寧に興味を持った方は、雑誌版をお手に取ってみてください。

そして、理事長としての仕事ぶりの一端が知れるのが、副理事長だった鈴木一著『随筆 サラブレッド』。これによれば、特別立法によって臨時競馬の国庫納付金を免除してもらい、施設近代化資金を捻出するという、いわゆる「有馬特例法」のアイデアは鈴木のものですが、その必要性を認識し、就任からわずか9ヶ月でこれを実現してしまう、頼寧の指導力・実行力・政治力には驚かされます。

この本は主に『優駿』に掲載された文章をまとめたものですが、競馬会初期の幹部が競馬に対してどういう考えを持っていたかがわかりますし、頼寧が亡くなった後、中山グランプリを有馬記念に改称する旨、通夜の席で報告したエピソードなども載っています。

（『サラブレ』2015年1月号掲載）

『ひとりごと 有馬頼寧個人雑誌 全19号揃』 有馬頼寧1955～1957年  
 養虫屋販売価格：40,000円



『随筆 サラブレッド』鈴木一 日本中央競馬会 1963年  
 養虫屋販売価格：5,000円